



がん患者さんの治療と生活をつなぐ
NPO法人 キャンサーリボンス

NPO法人 キャンサーリボンス

第3回「がん支えあいの日」 記念フォーラム
がんと「暮らす」「働く」

午前の部

午後の部

報告書



2011年7月

NPO法人 キャンサーリボンス

プログラム

(敬称略)

< 午前の部 : 患者さんのための治療と生活セミナー >

10:30 ~ 11:20

がん治療と痛みケア

< 講師 > 安井久晃 (国立病院機構京都医療センター腫瘍内科診療科長、がん薬物療法専門医)

< 司会 > 福田 護

(キャンサーリボンス理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト&イメージングセンター院長)

11:30 ~ 12:20

がん治療とスキンケア - 乳がんを例に

< 講師 > 土井卓子 (湘南記念病院かまくら乳がんセンター長)

< 司会 > 福田 護

(キャンサーリボンス理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト&イメージングセンター院長)

< 午後の部 : がん支えあい トーク&コンサート >

13:15 ~ 13:20

開会挨拶

福田 護

(キャンサーリボンス理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト&イメージングセンター院長)

13:20 ~ 13:45

講演 「がんと生きるための「構え」」

< 講師 > 藤井信吾

(財)田附興風会 北野病院院長、京都大学名誉教授、国際婦人科がん学会プレジデント、キャンサーリボンス理事)

13:45 ~ 14:40

パネルディスカッション

< パネリスト >

小西博之 (俳優、がん体験者)

坪井正博 (神奈川県立がんセンター呼吸器外科医長)

荒木葉子 (荒木労働衛生コンサルタント事務所所長、キャンサーリボンス理事)

田中登美 (大阪府立大学看護学部講師、がん看護専門看護師、キャンサーリボンス委員)

< コーディネーター >

14:40 ~ 14:45

展示ブースの紹介

岡山慶子 (キャンサーリボンス副理事長、朝日エルグループ会長)

自分らしい生活を支える知恵と工夫」を集めたブースの内容、見どころを紹介

14:45 ~ 15:00

休憩

15:00 ~ 15:20

新しい連携の紹介

図書館からの情報発信

池原 真 (川崎市立麻生図書館館長)

女性ががん患者さんを支援する「ハートプロジェクト」

山崎多賀子 (美容ジャーナリスト、がん体験者、キャンサーリボンス理事)

15:20 ~ 16:00

コンサート

スター混声合唱団

< 進行 > 山田邦子 (タレント、スター混声合唱団団長、キャンサーリボンス委員)

午前の部：患者さんのための治療と生活セミナー 【がん治療と痛みケア】

司会 福田 護 (がんセンターリボンス理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト&イメージングセンター院長)



がんになると、患者さんは様々な痛み A精神的な痛み、肉体的な痛み、治療に起因する痛み、がんそのものが起こす痛み (がん性疼痛) などAを感じていらっしゃいます。しかし、患者さんの中には、周りの方や医療者に気がつかったり、痛みがあるのは病気が進行・再発しているからだ」という思い込み、そしてそれを認めたくないという心理から、痛みを我慢する方もいらっしゃいます。痛みをコントロールし生活の質を維持するためにも、この講演で、がん性疼痛に対する理解を深めていただければと思います。

講演】がん治療と痛みケア

安井久晃 (国立病院機構京都医療センター腫瘍内科診療科長、がん薬物療法専門医)



『がん』は国民の2人にひとりがかかり、3人にひとりが「がん」で亡くなる時代で、非常にありふれた病気です。

がんの治療法には、大きく分けると、手術療法、放射線療法、化学療法、緩和医療がありますが、私の専門の化学療法と緩和ケアについて詳しくご説明いたします。化学療法の特徴としては、全身療法であること、薬剤感受性ががん種により異なること、副作用を伴うこと、治療効果の予測が

困難なことなどがあり、ベネフィット(利益)とリスク(不利益)を天秤にかけながら、患者さんにとって一番良い選択をすることを心掛けています。特に、副作用については、多くの場合は対処可能であり、我慢せずに医療者に相談していただきたいと思います。また、最善の医療を提供するために、患者さんと密にコミュニケーションすることの重要性に加えて、主治医だけでなく様々な専門医や医療従事者がそれぞれの専門性を発揮することで、質の高い「チーム医療」を推進することができるのです。

緩和ケアは、決して終末期医療ではありません。早期から治療と並行して行うことが重要です。がんの痛み (がん性疼痛) の治療も、緩和ケアのひとつで、痛みや症状の緩和には様々な対処ができるので、ぜひ主治医をはじめ医療者に相談し、自分の希望を伝えられる「賢い患者」になっていただきたいです。しかし、痛みや医療用麻薬については、なかなか患者さんに説明する時間もなく、誤解したままとなっているのが現状です。それを解決するために、京都医療センターでは、「ペインスクール」を開催し、がん性疼痛を患者さんに学んでいただき、少しでも安心して治療が受けられるための取り組みを、2008年よりスタートし、現在も継続しています。』

最後に、安井医師から会場の患者さんへ、「がんと共に歩み、これまでと同様の生活を続けてもらうのが、がん医療の目標」であり、「病気のつらさ 体の痛みは我慢しないで」患者さん自身の希望が尊重され、納得して治療がつけられることが大切なのです」という温かいメッセージをいただきました。

このセミナーを共催した、がん性疼痛緩和推進コンソーシアム 赤松利一氏より、「すべてのがん患者さんが痛みから解放されること」を目指す、企業の枠を超えたコンソーシアム (2008年～) による「がんの痛み治療の正しい情報発信活動」についてのご紹介がありました。

午前の部：患者さんのための治療と生活セミナー【がん治療とスキンケア - 乳がんを例に】

司会 福田 護 (キャンサーリボنز理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト& イメージングセンター院長)

がんを治療すると、化学療法等の副作用が皮膚に現れ、かゆくなったり、腫れたり、むくんだりすることが多くあり、治療の継続を困難にしたり、生活の質を落とすことにつながります。ぜひ皮膚症状の緩和のために、スキンケアの知識を参考にさせていただきたいと思います。

講演】がん治療とスキンケア - 乳がんを例に

土井卓子 (湘南記念病院かまくら乳がんセンター長)



近年、日本女性の間で乳がんが増加しており、年間4.4万人が罹患します。乳がんの治療では、全身療法 (ホルモン療法、化学療法、分子標的治療薬) や局所療法 (手術療法、放射線療法) などの様々な治療が総合的に行われていますが、これら乳がんの治療で、お肌がいたむことがよくあります。

化学療法や分子標的治療薬による皮膚症状、手足症候群の症状を緩和するためのスキンケアのポイントからお話します。まず、症状

の発現をできるだけ予防したり軽い症状で押さえるために、がん治療が始まったときからのスキンケアをお勧めします。例えば、お肌は、アルコールフリー、無香料、無着色の洗浄料や石鹸を使って泡でこすらず洗いましょう。保湿剤を塗布することは大変重要ですし、日焼け止めクリームも効果的です。ドラッグストアなどで売られている市販のスキンケア用品を上手に日常生活に取り入れるのも良いでしょう。そして症状が出たら、重症度に合わせて、クリーム、軟膏、テープ (貼付) 剤、角質柔軟剤などを使用することで改善がみられます。肌に違和感があれば、すぐに医療者にお伝えください。

乳房の切除手術を行う際にも様々な問題が発生します。例えば、補正用下着が必要になったり、知覚障害が広範囲に起こったり、創部の引きつれが気になったり、皮膚が癒着することで運動障害が発生したりもします。そんな時に、術後の創部ケアが非常に重要です。乳房温存療法においても、切除部分のケアをすることで乳房の変形を防ぎ、放射線照射による皮膚炎を緩和できるのです。縫合創の引きつれや癒着には、オイル・マッサージが有効な場合もあります。

また、抗がん剤治療をしている患者さんにスキンケア用品を試していただいたところ、一部の患者さんに肌色が明るくなるなど数値上の変化がみられたほか、気持ちの上でのプラスの変化が多くみられました。

「きれいになれ」と自分に言葉をかけながらスキンケアすることも、とても大切なことです。

湘南記念病院では、患者さん自身がセルフケアできるように、スキンケアのやり方を学んでいただくなどの支援を、看護師を中心に行っています。また、セルフケアの新しい取り組みとして、「ビューティセミナー」を開催し、脱毛に悩む方に治療中の眉の描き方を学んでいただくなどのサポートも続けています。』

最後に、患者さんに向けて、「自分を大切に治療を行いましょう」と声をかけていただき、「医療者として、肌ケアを通じて患者さんの心を支えていくことに関わりたいと思います」という力強いメッセージをいただきました。

このセミナーを共催したロート製薬 丹羽岳志氏より、キャンサーリボنزと共に「がん治療中のスキンケア」プロジェクトを立ち上げた主旨のご説明と、患者さんが日常生活にスキンケアを取り入れやすくするためのDVD『なりよい 治療と生活』のための皮膚症状対策 - 誰でもできる簡単スキンケア』のご紹介がありました。(DVDについては、がん医療を行う医療機関のうち、希望のあった施設に配布予定。)

午後の部 がん支えあいトーク&コンサート 開会挨拶



福田 護 (がんサーボンス理事長、聖マリアナ医科大学附属研究所プレスト&イメージングセンター院長)

最初に東日本大震災に被災された方々、その中にいらっしゃる、たくさんのがんの患者さんへのお見舞いを申し上げます。

今回の「がん支えあいトーク&コンサート」は、「**がんと働く**」をテーマとしています。

がんにかかった方の中で、半数以上が、がんを克服されている中で、**がんと暮らし、働く**ということはどういうことなのか、皆さまと一緒に考えてまいります。また、多くの方の経験や知恵をぜひ共有していただきたいと思います。

講演 がんと生きるための「構え」

藤井信吾 (財)田附興風会 北野病院院長、京大名誉教授、国際婦人科がん学会プレジデント、がんサーボンス理事)



「がんと生きるための「構え」」とは、とても難しいテーマです。患者さんにとっても難しいのに、医療者である私がそれを語るのはさらに難しいことです。がんと共に生きる私の患者さんにお聞きしても「それは難しいよ」と言われるくらいです。

今から20年くらい前は、患者さんのショックを考えて、がんを告知することをしていなかったのが、現在は告知をするのが普通になっています。これは、がんと知らずに治療をすることの方がはるかに難しいからです。患者会の集まりに参加させていただき、患者さん

のお気持ちを聞かせていただく機会があるのですが、最近では告知をされて、「**がんと闘おう**」と考える方が多くなってきているように思います。そういう時に、正しい情報と誤った情報をきちんと見極めることが重要になります。がんは、誰でも直せるものもありますが、術者の技術で差の出るがんもありますから、患者さんには、情熱を持って、患者さんのことを本当に考える、「構え」のある医療者を選んでいただきたいと思います。がんになって「一日の意味が変わった」とおっしゃる患者さんがたくさんいらっしゃいます。一日一日を大切に生きることこそが「**がんと生きること**」なのです。」

最後に、藤井医師から会場の皆さんに向けて、心のこもったエールが送られました。その言葉をご紹介します。

がんを患えば、心の奥深くでは、一度死を覚悟して、今ある命を喜ぶべし。

寿命は天命と心得て、さらに一日一日を大切に強く生きるべし。

生かされていることの喜びを深く感じるに違いない。

一日という意味の重大さを日々問答すれば明日が見えてくる。

そこに前向きの自らの姿が見えてくるはずである。

パネルディスカッション 『がんと暮らす』働くを支えるために、私たちができること』

<パネリスト> 小西博之 (俳優、がん体験者)

坪井正博 (神奈川県立がんセンター呼吸器外科医長)

荒木葉子 (荒木労働衛生コンサルタント事務所所長、キャンサーリボンス理事)

田中登美 (大阪府立大学看護学部講師、がん看護専門看護師、キャンサーリボンス委員)

<コーディネーター> 岡山慶子 (キャンサーリボンス副理事長、朝日エルグループ会長)



まず、NPO法人キャンサーリボンス副理事長 岡山慶子さんより、ディスカッションの主旨説明がありました。「がん患者さんの治療の現場で『働く』ことが語られておらず、働く現場で『がん』のことが語られていないことに問題があります。働くことは、収入はもちろんですが、自己実現のためにとても重要なことです。今日はがんを体験された小西さんや医療者、専門家の皆さまの経験と情報を共有する場にしたいと思います。」



小西博之さんは2004年に腎臓がんと診断され、その経験をもとに、今は年間60回の講演をされているそうです。「入院した時は、いつ退院するか、最初に何の仕事をするのかばかりを考えていました。今は、同じ病気で苦しむ人を何人元気にしてあげられるか、何人助けられるかを励みにしています。せつかくがんにならせてもらったんだから、皆ができることをやればいいんです。夢をかなえるきっかけになるのが、がんかもしれません。」と、ユーモアを交えながらお話しいただきました。

坪井正博医師は、「仕事に戻るためにはどうしたらよいかを考えながら、治療方針を考えるようにしています。がんの治療をしたことで、もとの生活に戻れなかったり、寝たきりになったのでは治療が成功したとは言えません。ウォーキングなどで体を適度に動かして体力を維持すると、治療もうまくいく場合が多いのです。何より患者さんには、何をしたいのか、はっきり言ってほしいですね。」とアドバイスされました。



田中登美看護師は、長く外来化学療法室でがん看護に携わってこられた経験の中で、患者さんの仕事復帰の相談にのることが多かったそうです。「治療と仕事、どちらかに決める必要はありません。日本人はせっかちで、どちらかに決めたいがりますが、少し間をおいて、考えを整えることも大事です。治療は同じでも、一人ひとり生き方は違います。自分自身を見直して再認識することを心掛けましょう。」



荒木葉子医師は、産業医として、企業内の社員の健康管理に携わる立場でお話しくださいました。雇用の人材確保のためにも、これからは、働ける人材が求められます。治療中のご自分の状態をフランクに話していただいて、どんなことができるか、何を手伝えればできるのかを周囲や産業医に相談して下さい。「自分にできること」にフォーカスして、マイナス思考にならないことが大切です。」

最後に4人のパネリストの皆さんから、患者さんに向けた、元気の出る励ましのお言葉をいただき、会場は大いに盛り上がりました。

展示ブースの紹介

ステージでは「自分らしい生活を支える知恵と工夫」を集めた、企業や団体の展示ブースの内容・みどころを紹介、ブースには多くの参加者の方が立ち寄りられました。このほか、冊子やリーフレットを自由にお持ちいただける情報コーナーや、書籍コーナーも賑わいを見せました。

【痛みケア がん性疼痛緩和推進コンソーシアム】



【スキンケア :ロート製薬株式会社】



【口腔ケア :サンスター株式会社】



【医療用ウィッグ 帽子 株式会社スヴェンソン】



【がん体験者からのメッセージ :アフラック】



【リボンズハウスコーナー】



【書籍・リーフレットコーナー】



このほかフォーラム会場では、「キレイの力」プロジェクト(NPOとP&G パンテーン主宰) による「東日本大震災被災地の女性がん患者さんに医療用ウィッグを贈る活動」へのご寄付を呼びかけました。その結果 73,983円が集まりました。皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

新しい連携の紹介

図書館からの医療情報発信 池原 真 (川崎市立麻生図書館館長)

私たちの身近にある「図書館から医療・健康情報の発信」を行う新しい取り組みについてお話しいただきました。健康関連の本のコーナーづくりの他、リーフレットの設置や、リボنزハウスとの連携が進められています。



女性がん患者さんを支援する「ハート・プロジェクト」

山崎多賀子 (美容ジャーナリスト、がん体験者、がんリボنز理事、ハート・プロジェクト賛同人)

女性がん患者さんが心豊かな生活を送れるような商品開発や情報発信を行うプロジェクトです。第1弾のゴシ ジュンコさん監修の帽子に続き、今秋には、がん治療中の女性の悩みに答え、顔を明るくしたリクマを隠す化粧品を発売するということです。また、ハート・プロジェクトの収益の一部は、がん患者さんの支援団体や若手医療者の育成活動等に寄附されます。



国立がん研究センターの取り組み

依田晶男 (独立行政法人国立がん研究センター 企画経営部長)

がん患者さんが暮らしのどんなことに不便を感じているかについて5月下旬にアンケートを実施されたそうです。その結果をもとに、患者さんの暮らしの工夫を共有化するためのプロジェクトが進んでいます。



コンサート【スター混声合唱団】



1日を通して行われたプログラムの締めくくりには、毎年恒例の山田邦子さん率いる「スター混声合唱団」が登場しました。山田さんの軽快なトークと共に、「春が来た」「夏は来ぬ」「雪」「ドレミの歌」を、会場の皆さんと声を合わせて楽しく合唱しました。

続いて、がん支えあいシンボルソング「あなたが大切だから」(山田邦子さん作詞 作曲)を歌い、最後は「上を向いて歩こう」手のひらを太陽に」を手話を交えて楽しく大合唱。会場が一体になってフィナーレを飾りました。



会場アンケート

【午前の部 A がん治療と痛みケア】

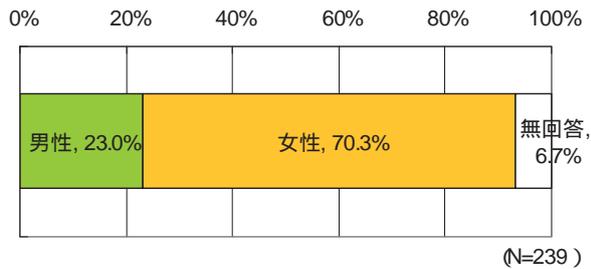
当日、会場で行った「来場者アンケート」の結果 (有効回答数は 239)

1. アンケート回答者のプロフィール

(1)性別

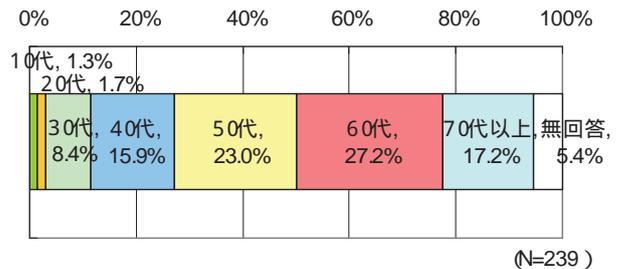
回答者は 7割が女性。

(男性 55 人、女性 168 人、無回答 16 人)



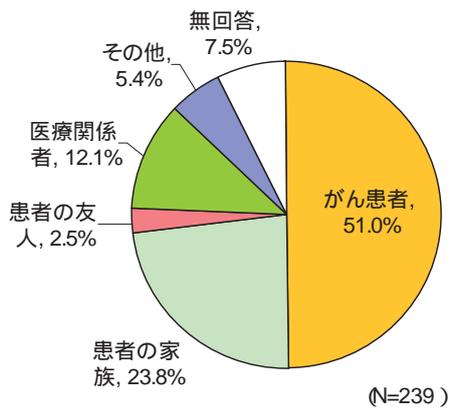
(2)年代別

50代 60代を中心に回答。



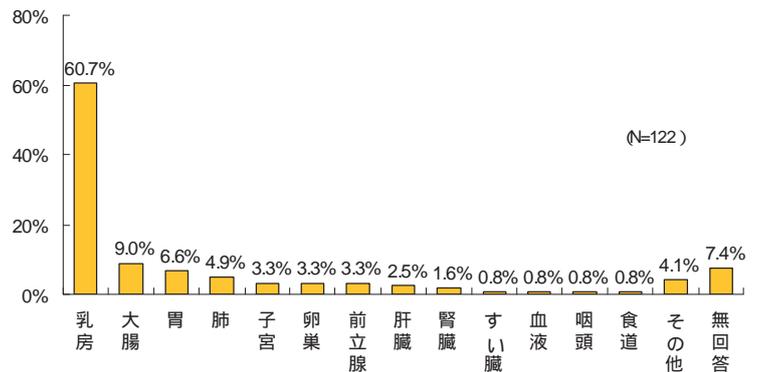
(3)立場

がん患者さん本人とご家族が 3/4。



(4)がんの部位 (MA :患者さんのみ回答)

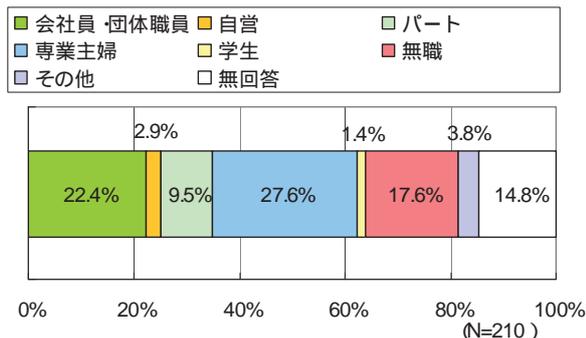
乳房が 6割。他には大腸、胃、肺が多い。



(5)職業 (医療関係者以外)

医療関係者以外の 210 人の中では、専業主婦、

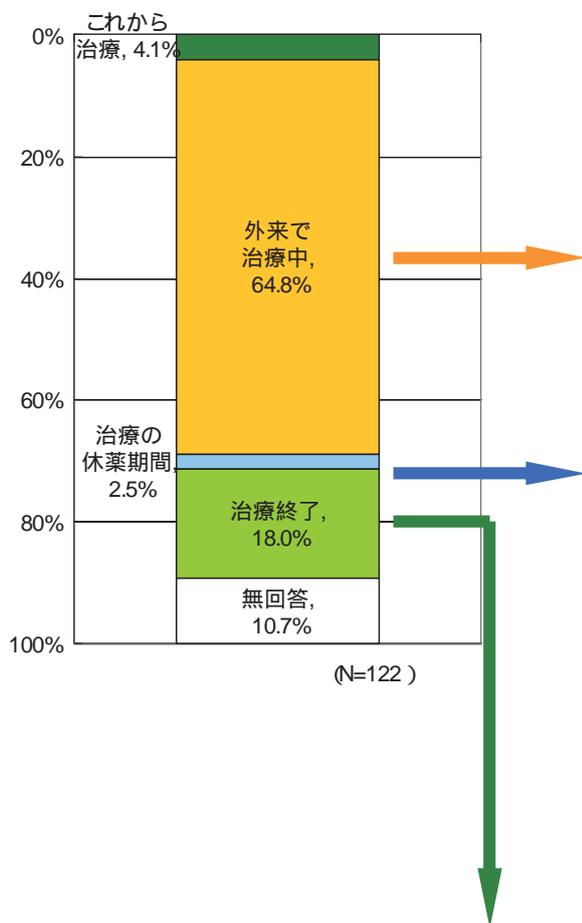
会社員、団体職員、無職層が中心。



(6)患者さんの治療状況 (患者さんのみ回答)

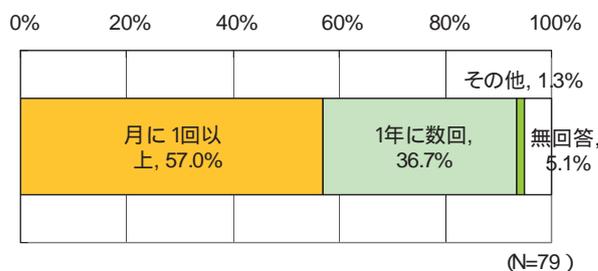
回答した患者さんは、現在「外来で治療中」が最も多く64.8%。

「治療終了」は18.0%。

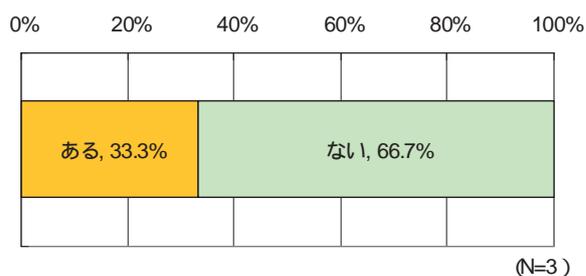


「外来で治療中の方」通院頻度

6割近くが「月に1回以上」の通院をしている。



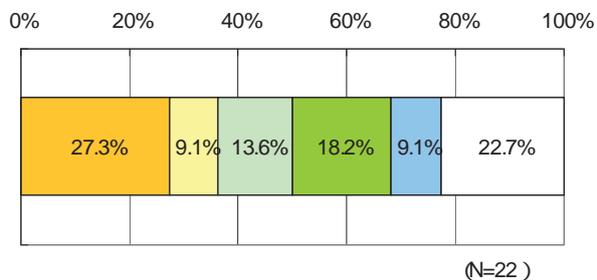
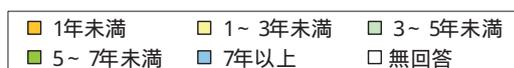
「治療の休薬期間の方」休薬期間中の外来治療
休薬期間中(3人)に外来治療があるのは



「治療終了の方」

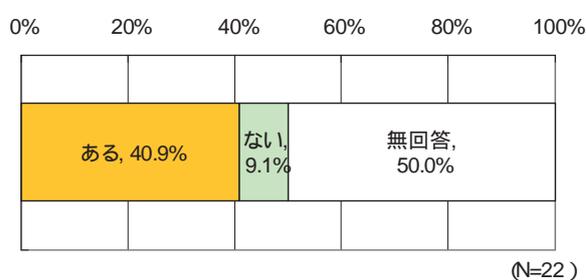
最後の治療からの経過年数

最後の治療から「1年未満」が1/4。



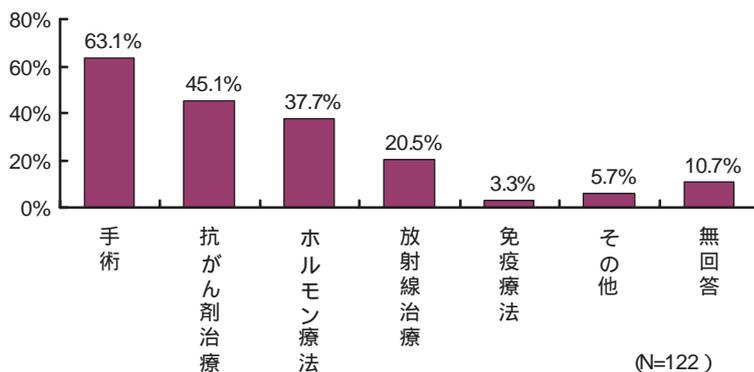
「外来治療」

治療終了後も、4割が外来治療を受けている。



(7)患者さんが受けている治療の内容 (MA :患者さんのみ回答)。

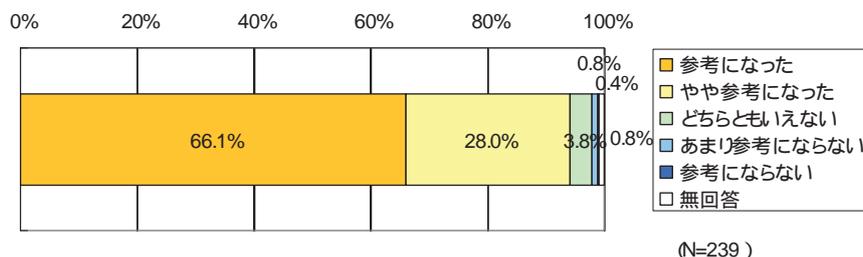
6割が「手術」をし、半数近くが「抗がん剤治療」を受けている。



2. イベントの内容評価

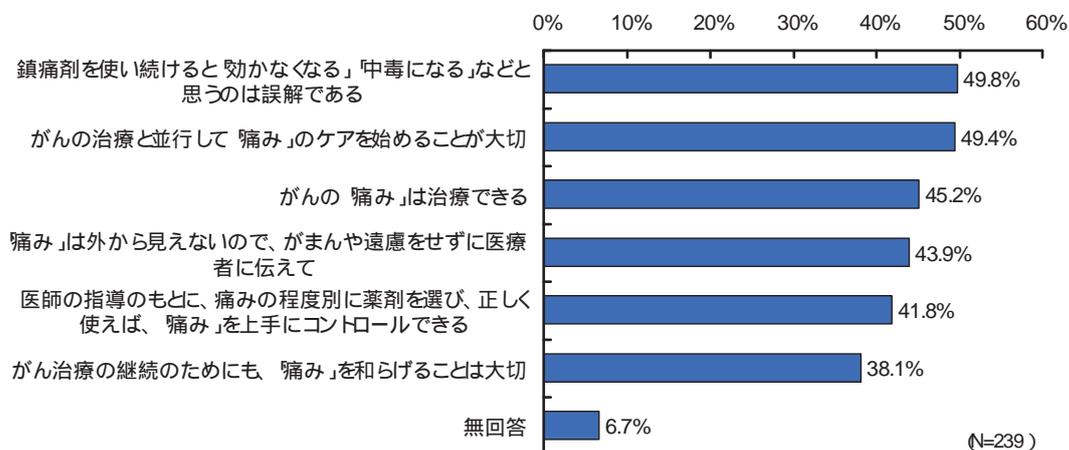
(1)「がん治療と痛みケア」の内容は参考になったか

講演は2/3が「参考になった」と答えており、「やや参考になった」を合わせると9割以上が好評価している。



(2)「痛み」のケアに関する内容で参考になったもの(MA)

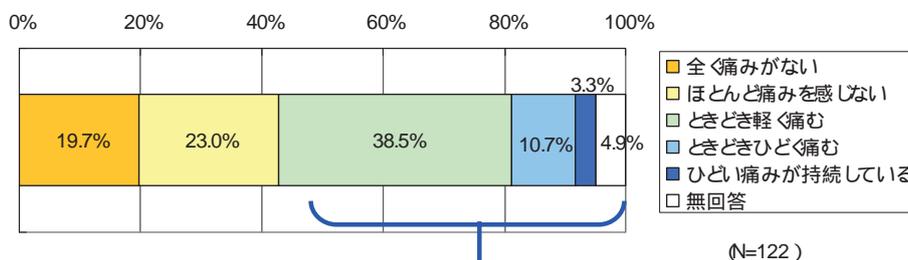
講演内容に関するいずれの項目も、約4~5割が参考になったと答えている。特に「鎮痛剤を使い続けると効かなくなる」「中毒になる」などと思うのは誤解である」と「がんの治療と並行して「痛み」のケアを始めることが大切」の割合が高い。



3.「がん治療と痛み」のケアの現状 (患者さんのみ回答)

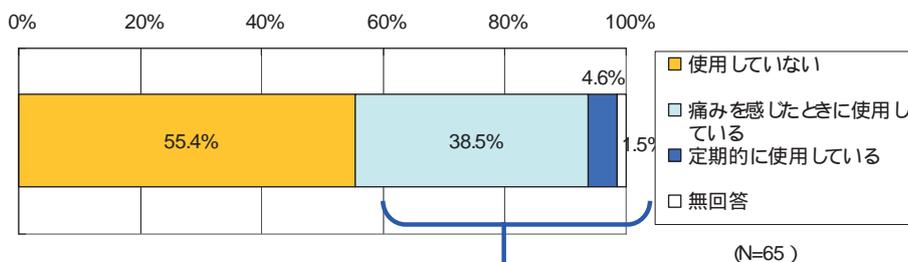
(1)がんの治療をはじめてから「痛み」を感じる(感じた)ことがあるか

がん治療開始後、患者さんの中では「ときどき痛む」(38.5%)が最も多い。「ときどきひどく傷む」「ひどい痛みが持続」を合わせると計52.5%の患者さんが何らかの痛みを感じている。



(2)痛み止め薬剤の使用状況(「痛む」と回答した患者さん)

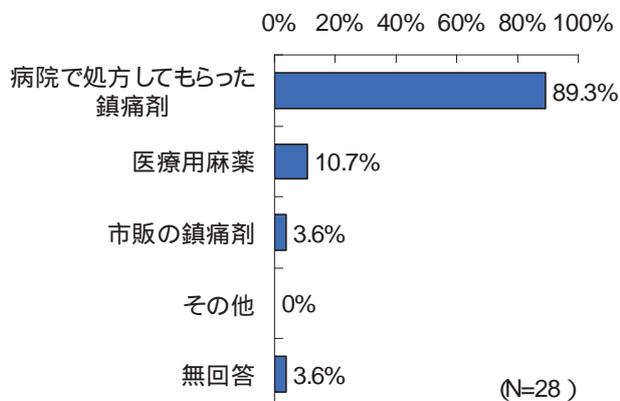
痛みを感じる患者さん(65人)の中で痛み止め薬剤を使用しているのは、計43.1%。そのうち「定期的」に使用しているのは4.6%で、大半は「痛みを感じた時」(38.5%)の使用である。



(3)薬剤の種類と効果(薬剤を使用している患者さん)

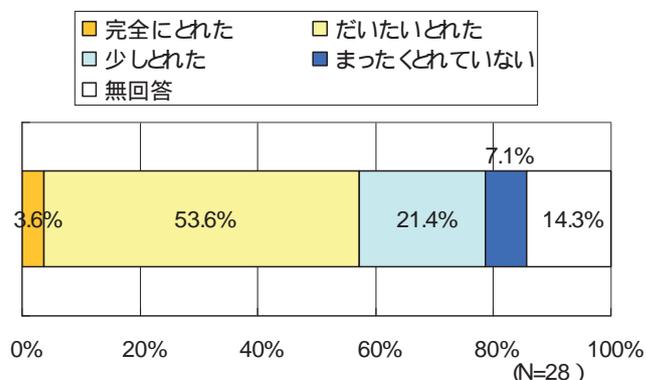
使用している薬剤の種類(MA)

9割の患者さんが「病院で処方してもらった鎮痛剤」を使用。



痛み止め薬剤使用の効果

鎮痛剤を使用して痛みがとれたのは約6割。少しを含め、計28.5%は、あまり痛みがとれない。



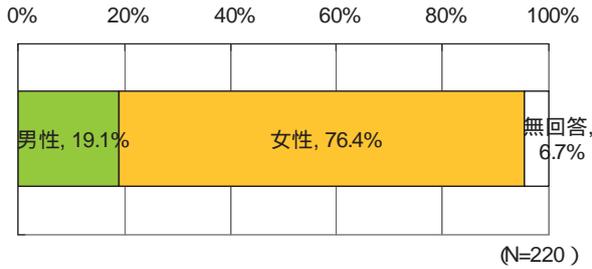
【午前の部B :がん治療とスキンケア - 乳がんを例に】

当日、会場で行った「来場者アンケート」の結果 (有効回答数は 220)

1. アンケート回答者のプロフィール

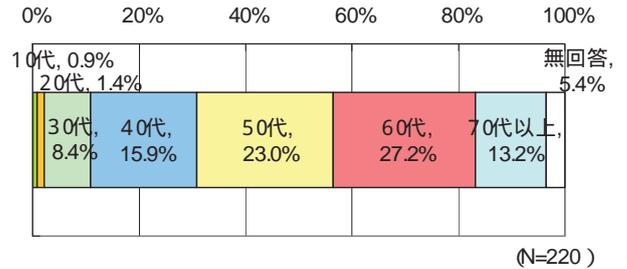
(1)性別

回答者は 3/4 が女性。
(男性 42 人、女性 168 人、無回答 10 人)



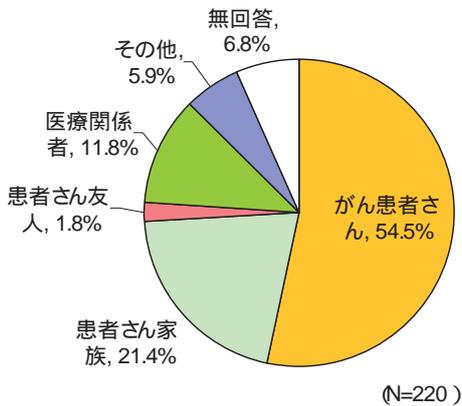
(2)年代別

50代 60代を中心に回答。



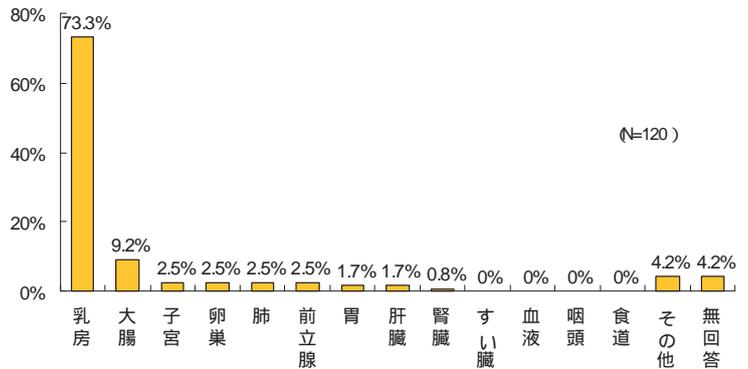
(3)立場

がん患者さん本人とご家族が 3/4。



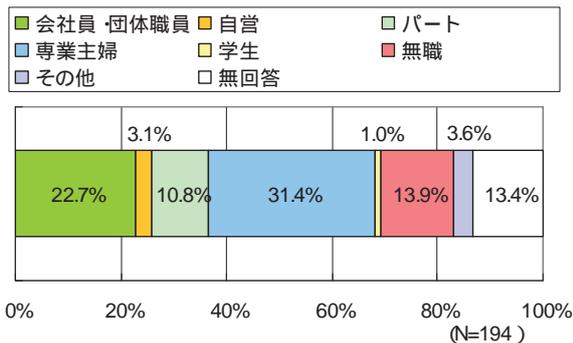
(4)がんの部位 (MA :患者さんのみ回答)

乳房が 3/4。次いで多いのは大腸。



(5)職業 (医療関係者以外)

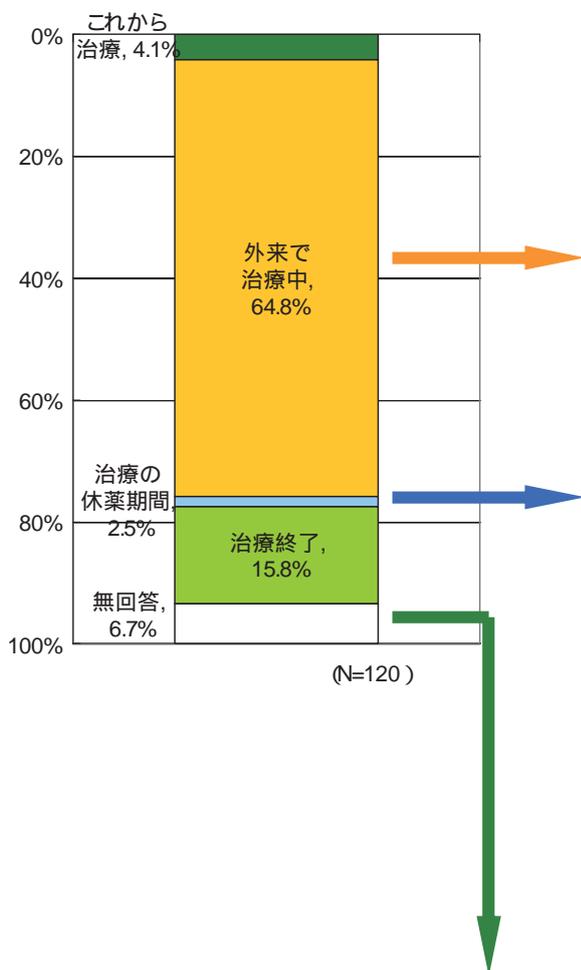
医療関係者以外の 194 人の中では、専業主婦、会社員・団体職員、無職層が中心。



(6)患者さんの治療状況 (患者さんのみ回答)

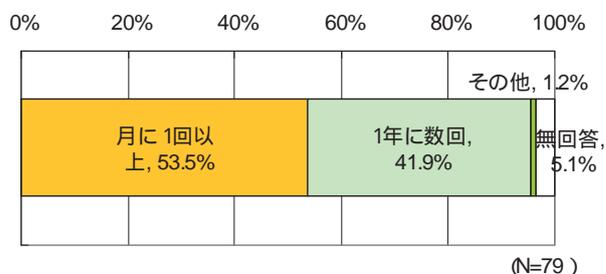
回答した患者さんは、現在「外来で治療中」が最も多く64.8%。

「治療終了」は18.0%。



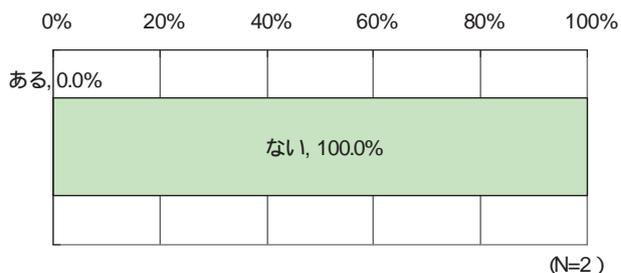
「外来で治療中の方」通院頻度

過半数が「月に1回以上」の通院をしている。



「治療の休薬期間の方」休薬期間中の外来治療

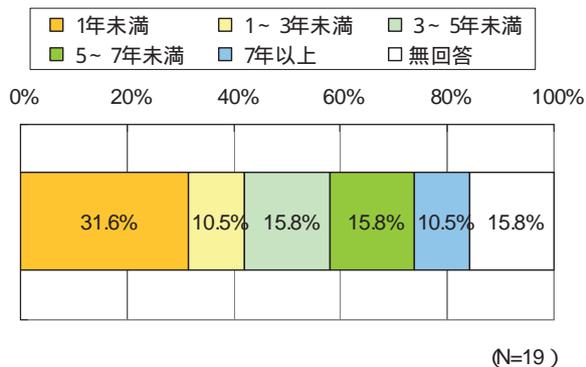
休薬期間中(2人)の外来治療は受けていない



「治療終了の方」

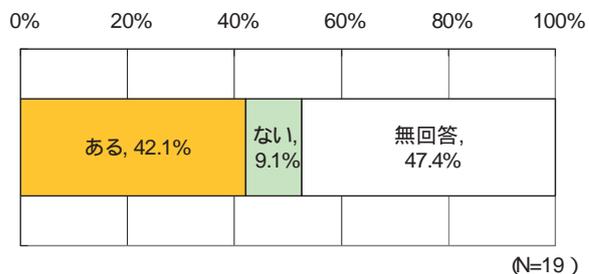
最後の治療からの経過年数

最後の治療から「1年未満」が3割。



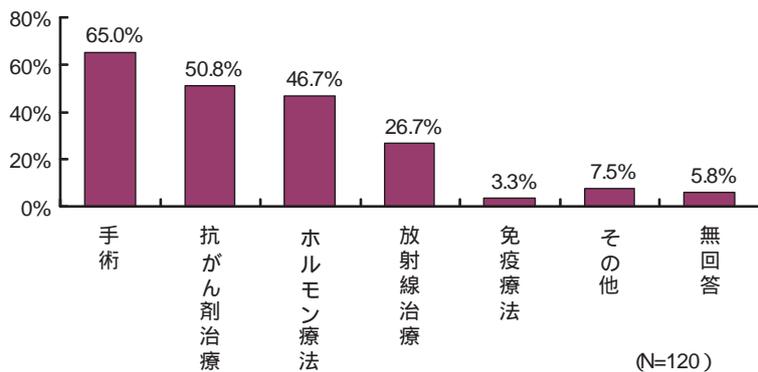
外来治療

治療終了後も、4割が外来治療を受けている。



(7)患者さんが受けている治療の内容 (MA :患者さんのみ回答)。

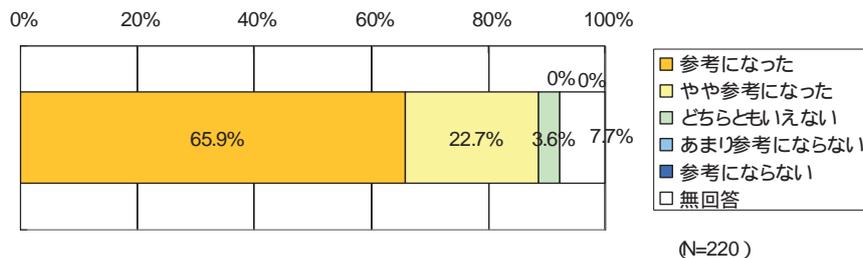
6割以上が「手術」をし、半数前後が「抗がん剤治療」や「ホルモン療法」を受けている。



2. イベントの内容評価

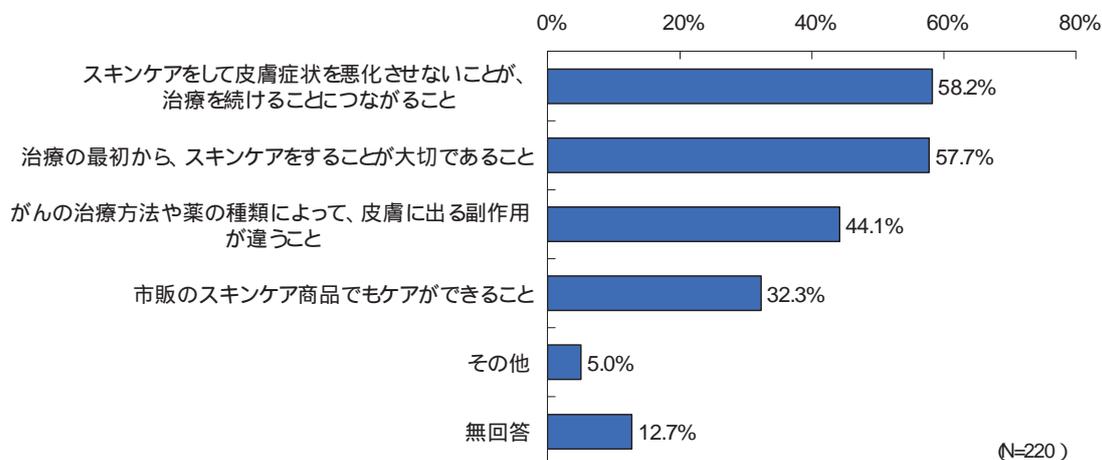
(1) 「がん治療とスキンケア」の内容は参考になったか

講演は 2/3 が「参考になった」と答えている。「やや参考になった」を合わせると、計 88.6%が好評価している。



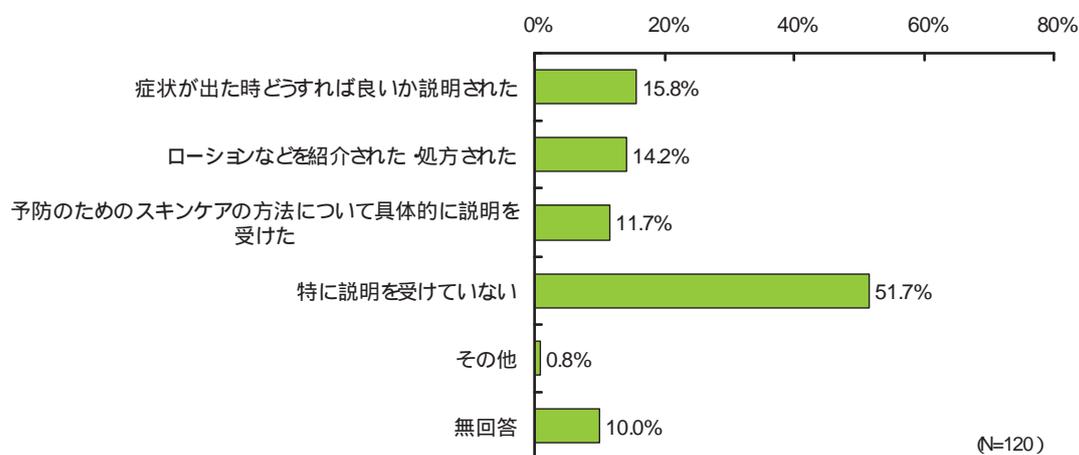
(2)治療中のスキンケアに関する内容で参考になったもの(MA)

参考になったとする割合が高いのは「スキンケアをして皮膚症状を悪化させないことが、治療を続けることにつながる」と「治療の最初から、スキンケアをすることが大切であること」で、いずれも6割近くにのぼっている。



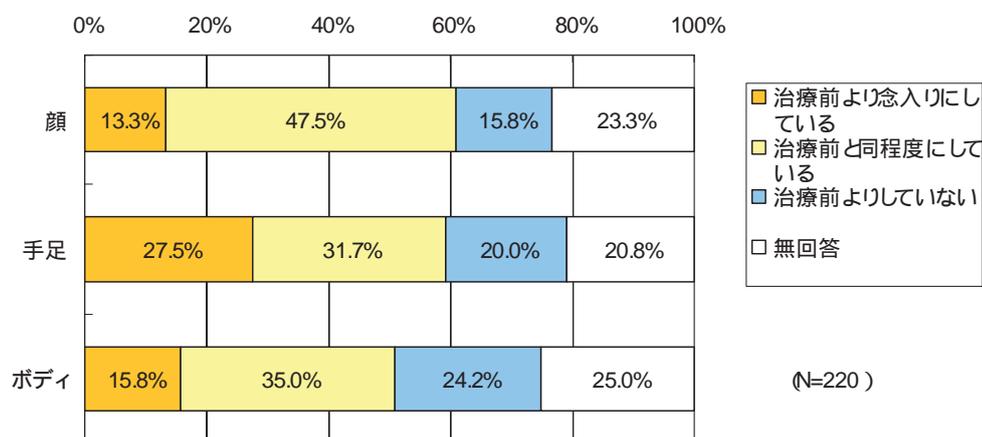
3.がん治療とスキンケアの現状（患者さんのみ回答）

(1)がんの治療に際して、医師やスタッフからのスキンケアやスキンケア剤についての説明（MA）
 スキンケアやスキンケア剤については、過半数が「特に説明を受けていない」と答えている。
 説明を受けている場合は、「症状が出た時どうすればよいか説明された」が最も多く15.8%。



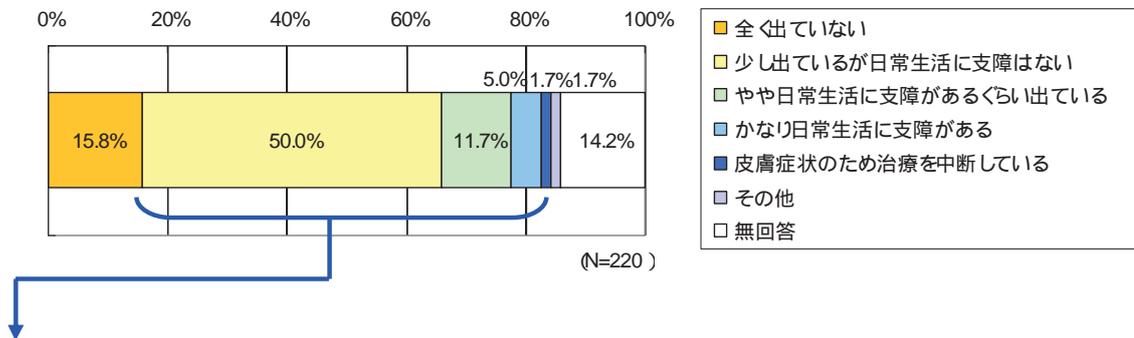
(2)スキンケアの実施状況

顔、手足、ボディのスキンケアの状況について質問したところ、「手足」は「治療前より念入りになっている」と「治療前と同程度にしている」がほぼ拮抗しているが、「顔」と「ボディ」は「治療前と同程度にしている」が最も多い。



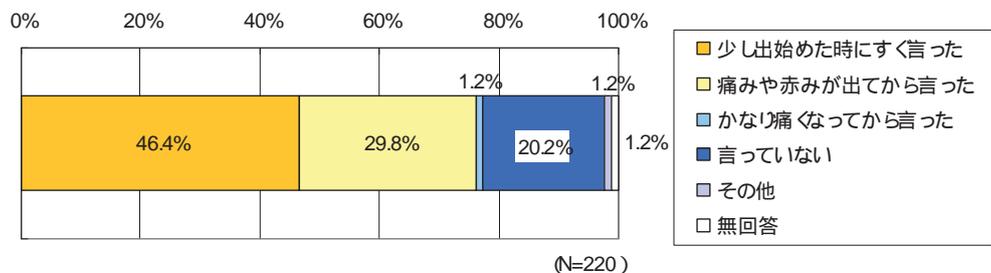
(3)がんの治療開始後の皮膚の副作用症状

治療開始後、7割の患者さんの皮膚に何らかの副作用症状が出ているおり、症状が出なかったのは15.8%にとどまる。



(4)皮膚に副作用症状が出た時の医師への報告 (皮膚に副作用症状が出た患者さん)

がん治療開始後、皮膚に副作用症状が出た時には、「少し出始めた時にすぐ言った」(46.4%)が最も多い。しかし1/5は医師に「言っていない」と答えている。



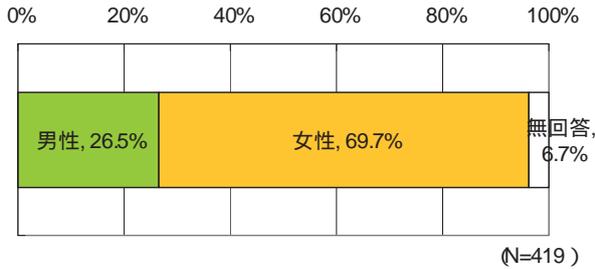
午後の部 :がん支えあいトーク&コンサート

当日、会場で行った「来場者アンケート」の結果 (有効回答数は 419)

1. アンケート回答者のプロフィール

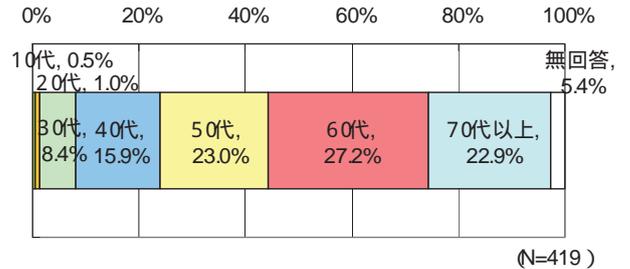
(1)性別

回答者は7割が女性。
(男性 111人、女性 292人、無回答 16)

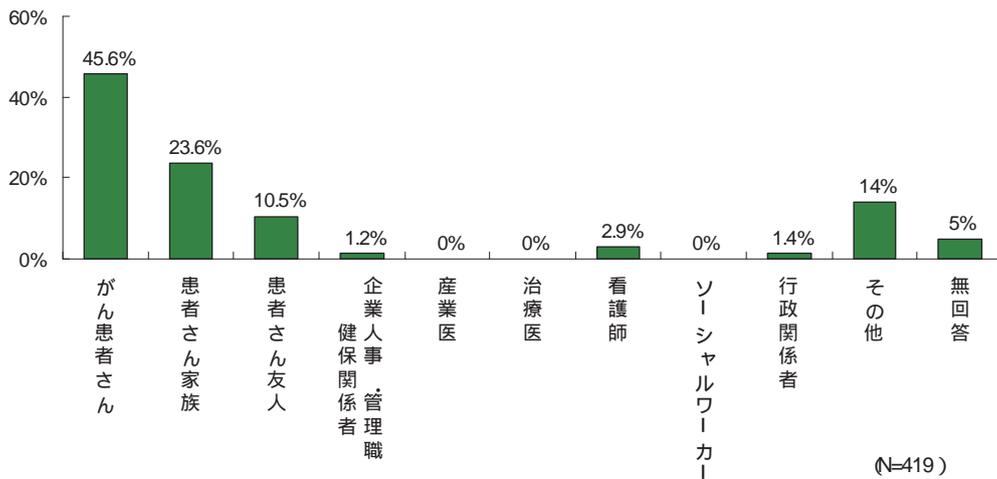


(2)年代別

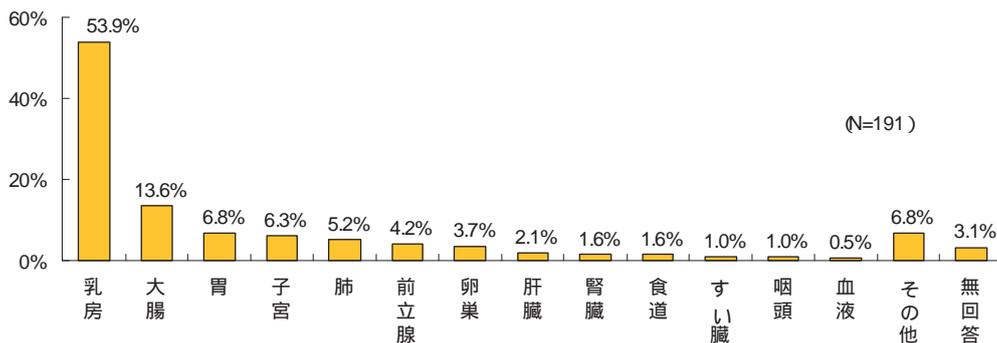
回答者は、50代以下と60代以上が
ほぼ半々。



(3)立場 ...回答のほとんどは、患者さん本人とその関係者。

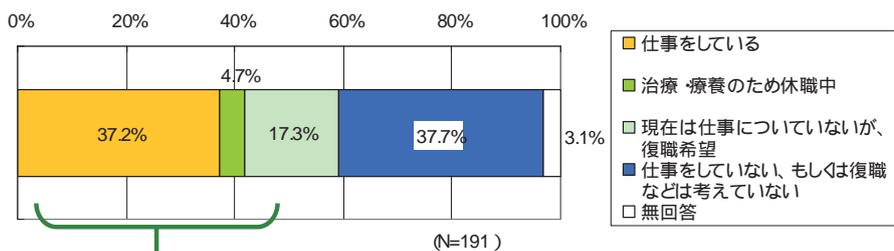


(4)がんの部位 (MA:患者さんのみ回答) ...乳房が約半数。以下、大腸、胃など消化器系、子宮、肺の順。

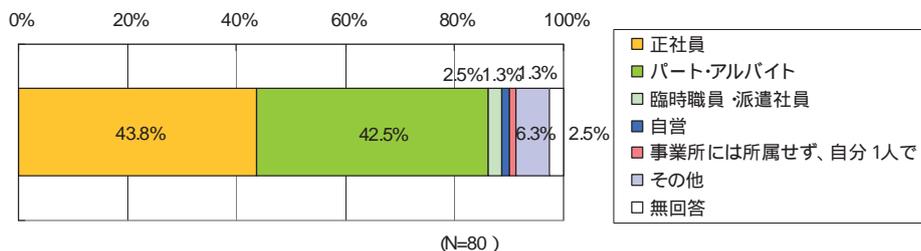


(4)がん患者さんの就業状況 (患者さんのみ回答)

仕事の有無 ...1/3 以上の患者さんが現在仕事をしており、6人に1人は復職を希望。



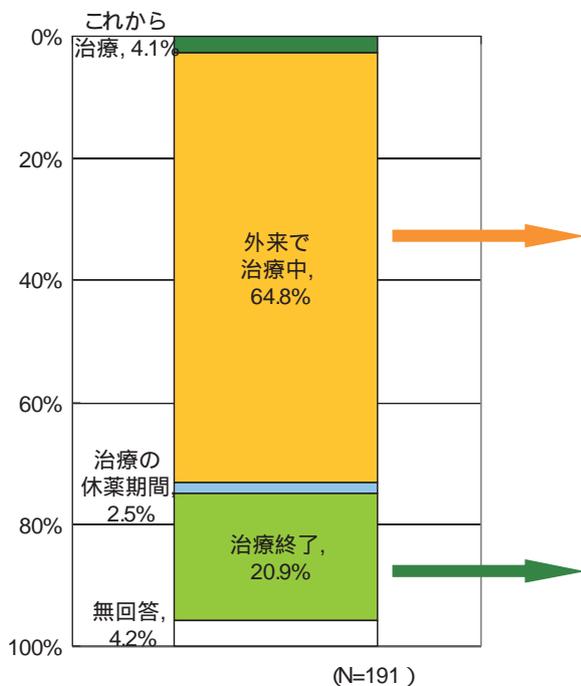
就業の仕方 ...現在仕事をしている、あるいは休職中の患者さんの多くは「正社員」か「パート・アルバイト」で、いずれも43%前後を占めている。



(6)患者さんの治療状況

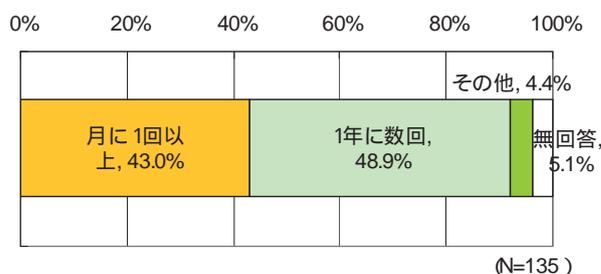
回答した患者さんは、現在「外来で治療中」が最も多く64.8%。

5人に1人は「治療終了」(20.9%)。



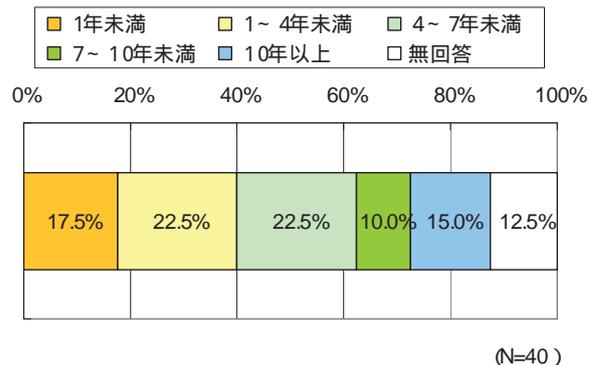
「外来で治療中の方」通院頻度

4割が「月に1回以上」の通院をしている。



「治療終了の方」最後の治療からの経過年数

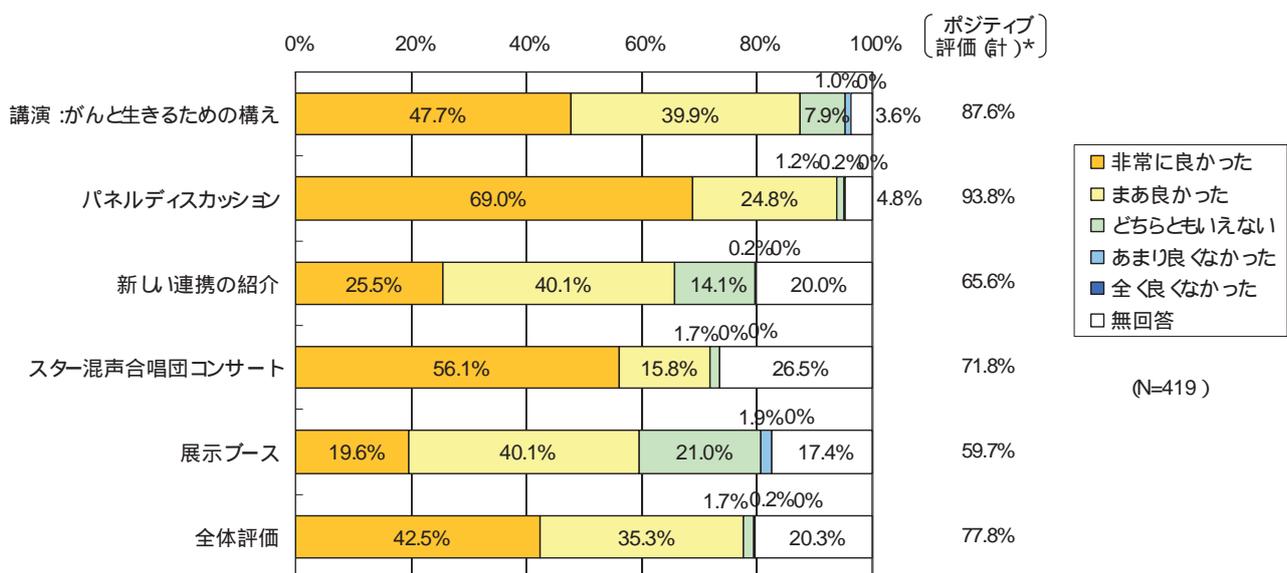
「4年～7年未満」をトップに、6割が7年未満。



2. イベントについて

(1) イベント内容の評価

「パネルディスカッション」は「非常に良かった」が69.0%とイベントの中で最も高く、「まあ良かった」を含めて計87.6%が高評価している。次いで「講演 :がんと生きるための支え」が評価されており(ポジティブ回答計87.6%)、フォーラム全体では計77.8%が良かったと評価している。



* 「非常に良かった」 + 「まあ良かった」

(2) がん治療中の生活を支え得る情報の中で役に立ったもの(MA)

最も役立つ情報は「がん体験者からのメッセージや体験談」(63.5%)で、他の情報の2倍以上という高い割合を示している。次いで、「職場復帰に際してのステップや工夫、連携について」(30.8%)、「痛みの治療やコントロールの大切さに関する情報」(28.4%)が挙げられている。

